

## 明日はわが身

お盆になると姥捨うばすて山伝説を思い出す。老婆を運んで来た空籠からかごを担ぎ下りようとすると子に父が捨てて置けというのと、「その籠、おつ父うの時に使う」と答えたという。

特養老人ホーム任運荘は開所以来お年寄りの盆正月帰省に力を注ぎ、今度のお盆も何とか五十人中二十六人が帰省できた。おい、めいなどの遠縁を除いて老親受け入れ可能と思われる家族は三十七人だから、十一人（約三割）が拒否されている。「死んじから帰るわ」。つぶやきは悲しすぎる。

帰省幸運組のうた―「わが家のごちそう任運荘にない味がする」「盆帰省嫁しずめの言葉に心は満ちて泊まる一夜も千夜の如し」「不自由な足を引きずり墓参り帰れた喜び先祖に告げる」

よいことばかりではない。「仏さま日帰り詣りで眼を回す」―ご仏前に合掌すますと息子がさあ帰ろうとせきたてる。帰省たった二時間。目が回っただけ。「はりきつて帰ったわが家も不自由で任運荘に帰りたいかな」―私は納戸こもに籠りきり、表座敷は

にぎやかな笑い声。

ホーム暮らしはいわば家族からの別居。別居でも頻繁な訪問や招待で温かい親子関係を保っているのが英米の慣習。日本では別居はまるで親子関係からの解放で、疎遠いや増すばかり。その著しい例が老人ホームにうかがえてならない。わずか一日の老親負担にもはや耐えられない嫁たち、同調する夫たち。子らは見ている。十一カ国青年意識調査で、「どんなことをしても老親を養う」と答えた日本の青年は二五%どまり、アメリカは五二%、フランス五五%、韓国は六九%というのに。

(一九九三年八月十八日)